

---

# **ゼロの使い魔～ルイズの双子の兄貴に転生しました～**

神雷鳳凰

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゼロの使い魔～ルイズの双子の兄貴に転生しました～

### 【Zコード】

Z5977Z

### 【作者名】

神雷鳳凰

### 【あらすじ】

あるとき村上怜生は、上から落ちてきた鉄骨につぶされ死んでしまった…

そして白い部屋に飛ばされたと思ったら自称神が俺に転生のチャンスをくれて、俺はルイズの双子の兄貴に転生したのだつた…

## プロローグ

俺の名前は村上怜生むらかみ れお監からはじめドジと言われるが、何もない「」で  
こけたりするの「」がドジなんだ…

それがドジです

なんかむかつくな電波が…おつとメタ発言だいつだった

とはいえ今僕はなんど…

何もない真つまつまつ白い部屋にいます

壁があるかすら疑えてくる…

「あなたは誰ですか？」

そんなこんな考へていると1人の…幼女？が立っていた、まるでと  
あるに出てくる子萌先生のような人だ

「俺は怜生です」

「…思い出しました、あなた私が間違えて殺してしまった」「くた  
ばれえええ」ガフツ！？！？！？

ドサリ……

やばい、蹴つちまつたじやあますたき起しねーと

「びつくつしたですー！」

「す、すまん…」

「まあいいです、さてあなたにはこれから転生してもらいたいんで

す

「転生？あの伝説の死人を別世界へ送る儀式？」

「ま、まあそうですね」

「じゃあどこに行けばいいんですか？」

「行けばわかりますよ」

「なら、一応能力ください」

「いいですよ、何がいいですか？」

「じゃあ、FAIRYTALEの魔法全般と、モンハンの武器の太刀の強いやつ一式とジェットブーツの死ぬ氣の炎式での」

「はい、では容姿はどうしますか？」

「じゃあ、髪を桜色にして、破れないマントをくださー」

「ではそこには立つてください……それでは…………この者に生を『与えよ……ザオラル……』

そつこわれると俺は目の前が真っ白になつた

## 第1話 ルイズの兄はチート級

さて俺は今ゼロ魔の世界に転生したところです、え？なんでもわかつたかって？それりやあ簡単さ、それは…

「さあライル、ルイズ、寝ましちゃうね」

「ぱーぶぶ《はーいよ》」

「ゾゾゾ…《寝ている》」

こういうこった、そう俺はどういう事かルイズの双子の兄貴に転生したらしい、ん？何故わかつたかって…そんなこたあ、決まってるだろ！勘だ！！！！

この主人公はバカです

またむかつく電波が…

おっと、いけねえ！またメタ発言か

それにしてもこの部屋広いな、そして俺は眼帯を付けている、何故かつて？それはだな…俺がオッドアイで生まれてきたからだよ…、でもこの家のヴァリエール侯爵と、ヴァリエール夫人は、俺を見捨てなかつた、ただし、俺は10歳になつたら領地が与えられるという話を聞いた、理由はエレオノール姉さんが俺のことを考えて言つたらしい、まあ俺はそつは思わないがな。

まあとにかく俺は魔法が使えるか試してみたが、まだ駄目だ、こつちでは先住魔法として扱われる火竜の魔法や、マスターの妖精の法律や妖精の輝き、また失われた魔法の時のアーク、具現のアーク、大樹のアークも使えない…まあ後々使えるだろうが、まあとにかく俺はこの転生生活を大事にしよう…

まあ俺はさつきの都市から5年たつた。え?なんで飛ばしたかつて?  
?転生前のあの年のままの心で、哺乳瓶などがないこっちの世界は、  
羞恥プレイだけで死ねる、まあ思春期真っ盛りのエロ男子だつたら  
うれしいだろうが、あいにく俺の思春期はもう終わっていた

さて俺とルイズはもう本格的な魔法の授業を受けているのだが、こ  
の眼帯凄い!だって大天使がくれた具現のアークで、一回作つたん  
だが、眼帯を付けてても両目で見ることができるし、すごすぎ!大  
天使に感謝だな!

さてそれにしても俺が先住魔法が使えることを知っているのはルイ

ズだけってところはいいな、何故ばれたかっていうのは、俺がマントを杖もなしに作っていたからだ、まあルイズには虚無の魔法だから黙つておいてほしいと言つておいた、まあこれも言いなおしてみれば神の創造の力みたいなもんだもんな

「さてライル様、ルイズ様、今日はファイアボールを教えたいと思います」

「ふあいあーぼーる？おにいちゃんにかわかる？」

「さあな？俺も知らない」

ルイズにお兄ちゃんと呼ばれるなんて言い身分だな…まあそんな話は置いておいて

ファイアボール  
火の玉…杖から火の玉を出す魔法、まあ簡単に言つとドラクエのメラだな

「ではやってみましょう…ファイアボール…！」

そう先生が言つと杖の先に炎の球体が現れ、飛んで行つた

「では一人とも、やってみましょう」

「はい…ファイアボール！」

そう俺が言つと、樹の杖の先から炎の球体が出てきて飛んだ、しかしルイズのほうは小っちゃい炎が出てすぐに消えた

「ほう、ライル様は初めてではありますが良い調子ですね、ルイズ

様はもう少し頑張ればうまくいくはずです」

そういうてルイズを励ます先生

その日俺は魔法が成功したいい気分と、あと5年でこの家を去る悲しい気分に浸りながら寝た。……

次の日、俺はカトレア姉さんと遊んだ、しかしこのせいで病気が悪化し、俺は10歳になる前に、家を追い出された、この追い出された日は、カトレア姉さんの病気が悪化して一ヶ月後だった、この時ルイズは俺が死んだと聞かされていたらしい、そういう話を聞いて俺は名前を変えた。……

ライル・インファニオ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールから  
レイン・アルファニオ・ル・ブラッド・デ・ア・メサトリアに。……

そして俺は、ヴァリエール家の領地から出て、俺の領地、メサトリアにたどりついて、そこで、過ごした、途中で、親父が来て、母親や、姉貴たちには内緒で俺を、原作に出てくる、学園に入学させてもらったのだ、……そしてこの事件から早くも11年の時が立った。……

## 第2話 ルイズの兄の使い魔

さて俺は今原作の最初の使い魔召喚の儀式のイベントを行つてゐる  
「この宇宙のどこかにいる我に使えし使い魔よ、5つのフォースの  
境目をくぐつて今ここに現れよーー！」

そう俺が唱えると蒼白い魔法陣が現れて銀の竜が現れた、いや違う  
な、リオレウス希少種、別名…銀火竜でもな出こいつが召喚された  
んだ？モンハンの世界とかぶつてるだろ、しかもほほ最強の飛竜だ  
し…

「ああ、ミスター・メサトリアは銀の竜を呼び出したんですか？」

「はい」

「フム…この竜は火竜の上級クラスですね…では契約を」

そう先生に言わると俺は呪文を唱え始めた

「我が名はレイン・アルファニオ・ル・ブラッド・デ・ア・メサト  
リア、五つの力を司るペントゴン、この者に祝福を与へ、我的使い  
魔となせ」

そういうてリオレウス希少種に口づけをし契約をした

「それにしても、この竜は珍しい竜ですね、始祖プリミルの乗つて  
いたという伝承の竜にそっくりです」

「そりなんですか？」

「ええ、この伝承には付け足しで『始祖プリミル、銀火竜にまたがり始祖の4体の使い魔とともに移動した』と書かれていたと思います」

「マジか！俺がいることによる補正か！？」このあと俺は授業をさぼつた、まあ先生に入つたし…

「リオレウス希少種は小っちゃくすれば入るからよかつたぜ」

そう、こいつの大きさは召喚時から小さかつたからよかつた、まあ大きくなるがな

「それにしてもこいつは、喋れるか？」

『何か言つたか？<sup>マスター</sup>主人』

「ほう、お前は喋れるのか？」

『まあね、でもありがとよ主人、あんたのおかげで古龍に殺されずに済んだ』

「そりなんのか？まあ一応礼は受け取つておくよ」

『それにもしても、主人はどんな魔法が使えるんだ？ココは魔法の世界なんだろ？』

「ああ、俺はまあ先住魔法などがあるな」

『そりやあ決まつてんだろ…』

「妹と、彼女様のところにだよー」

「そりやあ決まつてんだろ…」

『ああ、あいつって誰だ?』

「さて、アイツのどこに行くか…お前も来るか?リオ」

するとリオは普通のキュルケの使い魔の少し大きいくらいの大きさになつた

そう言葉を交わすと俺は立つて、リオレウス希少種のリオに向かつてこひつ唱えた

「//マムー！」

『お、おひつ』

「そりやか?まあいいだろつ、お前のこと少し小さくするからな

## 第2話 ルイズの兄の使い魔（後書き）

今回凄く短くて済みません、なるべく2日の間に投稿します

### 第3話 ルイズの兄の妹と彼女

さて俺は今ルイズの部屋の前にいるんだが… 中から才人らしき人の悲鳴が聞こえる… やばくねえか？

「さつさと入って助けてやるか…」

そういって俺はドアをノックする… 返事がないとなると…

『『『しようがないなあ…』』『まあ、ノックしても出なかつたんだし…』』『何か言われても僕は、悪くない』』

そつづぶやいてドアに向かつてプラス螺子を投げつけドアを破壊すると轟音が響いていきそうだったので壊した時に出る音の音量をなかつたことにした  
ちなみに何故俺が球磨川先輩の『オールフィクション大嘘吐きブックメーカー』をもつてているかというと『具現のアーク』を使って『却本作り』と一緒に応用して作ったのだ

「何よ一体…お兄ちゃん？」

「ん？なんだお前は、兄の顔も忘れたのか？だからゼロ、ゼロって呼べるんだ…まあそういうやつは本当にゼロなんだが…元気だつたか？ルイズ」

「え？お兄ちゃん？え…でもなんで…えレオノールお姉さまは死んだって言っていたのに」

「あのくそ姉貴が本当のことを嘘ついてんのか？俺はあいつがカト姉が病気になつた件についてのことで家追い出されたんだぞ」

「なんだ…生きてよかつた」

いや、泣いて言われても…俺の理性が壊れそつ…いや、ダメだこいで壊れたら、アイツに向て言えぱいにかわからぬ

「まあその話はここまでにして…お前、この野子に向してたんだ？」

「ああ、サイトの」と…ただ単にゼロ、ゼロ言ひながら仕置きしたのよー／＼／＼／＼

そういうて顔を赤らめながら《ぶー》という擬音が聞ひえやつな可愛い格好をしてきた

「まあそれなら、今回ほんじんぢやないか？言ひておくが平民だからと書いて苛めるなよ平民でも、俺ら貴族のために働いてくれているんだ、前も行つたが俺たちは平民の人たちが働いてくれるから過ごせるんだ、良いな？」

「うそ…」

「じゃあ俺はこのアモウと申すか？」『行くよ』

そうこうして俺は腕をかざし

「『あれでは世をござる温存くださ…』、『A LINE FIGHTING』

『…』

そう俺が叫ぶと部屋が元通りに戻った

「じゃあ俺は行くから……ワーピングポイント 移動距離間」

そういうと俺はルイズの部屋から姿を消した

「さて次は彼女さんのところにだが……」

「え？·さつきから彼女彼女言ひてるけどだれかって？」

「2年ぶりに会つんだよなあ…元気かなあ…タバサ」

そういうて俺はタバサの部屋にノックして入った

### 第3話 ルイズの兄の妹と彼女（後書き）

すいません今年の投稿はこれで終わりそうです。  
すいませんどうかゆるし…あ、石を投げるのだけは…?

あと3日前に約束していた登校日に投稿できなくてすいません…  
次回もお楽しみに!  
そしてよいお年を…!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5977z/>

---

ゼロの使い魔～ルイズの双子の兄貴に転生しました～

2011年12月30日23時48分発行